

現代社会における死生観の変容と「死の対話の場」の生成 Transformation of the view of life and death in modern society and generation of “place of dialogue of death”

吉 川 直 人

Naoto, Yoshikawa

要旨

本研究の目的は、死にまつわる多様な論点の中で、死の対話に着目し、対話の場が創出される土壌が、どのような経緯により生じてきたのか。死の捉え方の変容、死を悼む行為の変容、死を語る場の生成の3つの観点から先行研究を概観して、明らかにすることを試みる。上記の観点から、死のタブー視の変化、死生観の変容、死への向き合い方の多様性の土壌から出現した取り組みが死の対話であることが示唆された。

キーワード：死生観、死の対話、死を語る場

はじめに

死はすべての人が当事者となる話題である。死についての話題は多岐にわたるため、取り上げられる機会は多く、死の対話の場の広がりもあり、タブー視する風潮は薄れてきたが、死に対する心構え、死に対する備えなどに対しては、長寿化や医療の高度化に対応できているとは言い難い。現在日本の高齢化率は28.7%（2019年厚生労働省：人口動態調査）となり、少子超高齢化の進展により人口が減少し始めている。こうした社会において、死はどのように経験されるのだろうか。またその死について、人々はどのように語るのだろうか。こうしたなか、死の対話を実践する「デスカフェ」が各地で開催され、死を語る場が設けられるようになった。

本稿の目的は、死にまつわる多様な論点の中で、死の対話に着目し、対話の場が創出される土壌が、どのような経緯により生じてきたのかを明らかにすることである。死の捉えられ方が変容していく状況について、従来タブー視されていた死が、どう語られるようになるのか、そして死に関わる対話の場が生成されるに至る経緯を、先行研究により検証する。

第1節では、ウラジーミル・ジャンケレヴィッチの死の人称、ジェフリー・ゴラーによる死のポルノグラフィ、鷹田佳典の悲嘆の個人化を巡る論考、高橋正の死生観の変容に関す

る論考を参照にしながら、死の捉え方の変化について記述する。第2節では、具体的な葬送儀礼を例にして、死を悼む行為の変容や死生観の生成などを記述する。そして第3節では現代社会における死を語る場の生成について、死がタブー視されことなく煽情的に語られた事例を参照しながら、終活、行政の取り組み、草の根の実践からなる死の対話の場を概観する。死生観、死を語る場の布置等に焦点を当てて、現在の死にまつわる社会的事象から、デスカフェをとりまく死に関わるコミュニケーションの場についての現代社会の取り組みの概要を探っていく。

1. 死の捉え方の変容

死は、未知で不確定であり、恐怖や不安が付きまとう。また、死と生についての個人の考え方を開示することは、ときとして周囲との軋轢等が生じさせる。悲嘆の分かち合いは痛みを伴う行為である。健康なものにとっては価値観としての死生観、難病をわずらう人や終末期にある人にとっては、未知であり不安なものとしての死、離別経験者にとっては、痛みのある思いとしての死である。

死はさまざまに語られてきた。ウラジーミル・ジャンケレヴィッチ（1978）は、死の話題に対して関わる際の「死の人称」を、1人称、2人称、3人称として定義した。1人称の死は、自分の死、2人称の死は、身近なものの死、3人称の死は他人の死である。また、死の話題として、1人称の死で話題となる者は、どう死にたいか、死に直面したときの自分、死に対する思い等である。2人称の死の話題は、身近な人の死、愛する者の死、グリーフケア等を語る場合の死である。3人称の死の話題は、臓器移植、脳死、死を迎える場の変化や傾向等がある。自分とは異なる死、思うこと、語ることに痛みを伴うものではない概念やテーマとしての死である。

また、ノンフィクション作家の柳田邦男（1995）は、2.5人称の死を提唱した。医療従事者等は、「2人称の視点」である自分の家族に寄り添うような温かさと「3人称の視点」である専門家としての知識と能力をかね備えた「2.5人称の視点」を持つべきという。死に関わる専門職は、自分とは別個の事象としての死ではなく、身近な、愛するものの死でもない、冷静さと愛情を持って死に相対するという考え方である。死のフィールドは、多岐にわたる。医療従事者等が関わる死とは、終末期医療や看取りケアにおける臨床の死である。また、葬儀社が関わる死後の葬送儀礼の委託、宗教者が行う葬送儀礼、当事者の心のケアがある。

本節では、近代社会において、死がどのように経験されてきたのか、そして死の取り扱いが、どのように変容してきたのかを明らかにする。死に関わる対話は、ある契機を境に変化することもある。死を語る場を成立させる土壌は、どのような経緯で育まれたのだろうか。

1-1. 死のタブー化

死について、話題として取り上げることを忌避したり、遠ざけたりするのはなぜであろうか。死は、恐怖や痛み、苦しみ、悲しみなどネガティブな要素が付きまとう概念、言葉、事象である。フランスの歴史家フリップ・アリエス（1983）は、『死と歴史』で次のように述べる。

われわれに起源がよくわかっているこの感情（他者の死についての耐えがたい気持と、死にゆく者のその周囲に対する新たな信頼）は、現代の特徴をなす別の感情に覆い隠されてしまいました。もはや死にゆく者ではなくて、社会、周囲の者たち自体に、死の苦しみの醜さや、幸せな生のさ中に死がみられるただそれだけのことでひきおこされる混乱や、強すぎて耐えがたい動揺を、まぬがれさせてやろうという感情です（70）。

死による喪失は痛みを伴う。死に向き合い、悲しみを味わい、悼むことにより苦痛や混乱を生じる。残されたもの、残されるものに生じる苦痛や混乱から身を守るために死から目を背け隠すことがある。これを、「死を前にしての現代的態度、すなわち幸福を維持するための死のタブー視」と指摘した。この現象を「死は名ざしでよべぬものになってしまいました。今後はまるで汝も、私にとって大切だった者たちも、われわれみんながもはや死すべき運命をもたぬかのようです」（86）と述べている。死にまつわる諸問題を隠し、見ない、見せないことが、生者の幸福を維持することにつながるという視点である。

また、イギリスの人類学者ジェフリー・ゴラー（1994）は、『死と悲しみの社会学』において、死のポルノグラフィという概念を提唱した。19世紀は性がタブーとされていたが、20世紀に性がオープンになり、死のタブー視が進んだとしている。

死・苦痛・悲嘆などへの言及に対して過度に神経質になるのは、この冷淡さの一側面、裏側の顔である。こうした人間の諸経験は、まるで風俗を乱すものであるかのように扱われ、従ってそれらを口にしたり描いたりすることは、成人にとって好ましからざるもの、そして未成年者を堕落させるものと見なされる（179）。

死は、現在の生を生きるものにとって、隠すもの、目を背ける対象であった。死の悼み、悲しみが、「弱さ・わがまま・不埒な悪しき習慣」として、悪影響を及ぼすからとしている。強さ、協調、健康的で良好な感情が、生きるためには必要とされる。死と悲しみにとらわれ、言及することは、不健康なとらわれとなりかねず、排除の対象となったのであろう。

病気、老衰、事故など死に至る要因は様々である。不慮の死ではなく、迫ってくる死を首肯し、向き合う時間や場が与えられる死もある。その際にも、己の死を受け入れるには、段階がある。

エリザベス・キューブラー＝ロス（1998）は、「死の受容のプロセスとして、1 否認・隔離、2 怒り、3 取引、4 抑うつ、5 受容」の段階をたどるとしている。

アルフォンス・デーケン（2003）は、上記の5つに加えて6番目となる期待と希望を付け加えた。「私自身の経験によれば、特に死後の生命を信じる患者の場合は、さらに進んで、永続性への『期待と希望』という第六の段階に達することが多いのです。例えば、天国で愛する人と必ず再開できるという確信を抱く人の場合は、死にまさる生命を積極的に待ち望みながら、平安のうちに死を迎えています」（156~157）としている。段階を踏んだ受け入れ過程をたどることが、自らの死の受け入れを可能とするが、死後の生命という考えが、より安らかな死を可能とする考えである。

日本社会における死後の考え方について、言語哲学者である伊佐敷（2019）が、因果応報の観点から死について論じている。「死んだらどうなるのかに対する考え方の6つのパターンとして、1 他の人間や動物に生まれ変わる、2 別の世界で永遠に生き続ける、3 すぐそばで子孫を見守る、4 子孫の中に生き続ける、5 自然の中に還る、6 完全に消滅する」と述べている。

上記は、伊佐敷が日本人の死後観のイメージをまとめたものだが、輪廻転生、他界観、仏教、神道、祖先崇拜が入り混じった考えである。つまり、日本社会において死は、死後の世界から、継続と継承、無に至るまで、幸福な死から悲観的な死まで、複数の価値観が混ざった多様性を有している。

死生学者である堀江宗正（2014）は、死のタブー視が終わり、「死のタブー視のタブー視」とも呼べる傾向が強まったという。

日本の場合、死を汚穢として見て、死にまつわることを文字通りにタブー視する文化が元々根強く、それに対処するために葬送儀礼が発達してきたと思う。しかし、それは今日では大幅に簡素化されつつある。そのこと自体、タブー視が弱まったことの一つの表れではないだろうか。とくに遺骨を置物やアクセサリーにする「手元供養」や、遺骨を自宅に保管して写真で自己流の祭壇を作るなどの行為から、死の汚穢に対する感覚は急速に失われていると考えられる（11）。

葬儀は、残されたものが悲しみと向き合い、区切りをつけるための儀式でもある。死をタブー視する感覚が失われたことは、葬送儀礼にも影響をあたえ、その簡素化や多様化が進行しているとする。ゆっくりと段階を踏んだ葬送儀礼ともつながっていた死への恐れや死者への敬いが、亡くなるわけではない。手元供養、自己流祭壇は、新たな死の文化を予感させる。また、宗教学者の島田裕巳（2021）は、地方の過疎化と高齢化も相まって、死を悼む場の継承が困難になり、墓じまいが進んでいることを指摘している。人口構造の変化や、継承者不足も、要因であることが示唆されている。

被害者遺族である入江杏（2012）は、曖昧性と付き合い、喪失から目をそらさないことで「悲しみを生きる力」に変えていくことを提唱している。悲しみを共有することは、心の荷を軽くし、自らの生を歩むための区切りとなりうる。悲嘆の個人化により、自由度は高められるが、孤独を感じることも増えるであろう。悲嘆について、他者と対話することで、それを分かち合う場が必要とされている。

1-2. 死生観の変容

宗教学者の島藺進（2012）は、『日本人の死生観を読む』で死生観が生み出される様式として、「自らの死を予期してそれに備えること、死を間近にした経験を支えとして生きる生き方、死後の生についてまとまった考えをもつこと、死者とともにあることを強く意識する生の形、他者との死別の悲しみを重く受け止めて生きること等」（14）。としている。島藺の指摘は、死生観が生み出されるためには、芳醇な文化と土壌が必要な事を示唆している。

高橋（2021）は、死生観を以下のように定義している。

生きることと死ぬことについての考え方であり、行きていく上で重要な判断をするときの指針となるものである。……ここで扱う死生観は、一人の人間がどのように死を受け入れて、乗り越えて、どのような生き様をしたかという個人的な生死についての考えではない（20）。

さらに、「死生観はすでに成立した静的なものではなく、常に変化する動的なものである」（22-3）とする。すなわち、「現在の死生観に係る諸民族の行事や祭祀は、諸土着民族の死生観（B）の上に、世界宗教であるキリスト教の死生観や仏教・儒教の死生観（A）が重なり、両者の相互作用の結果（C）」である。つまり、日本人の死生観として固定化されているものや一つの枠でくくれるものではなく、変容を続けていくという考えである。また、急速な社会の変化にともなって新たな死生観が生み出されると示唆する。

死生観を、死と生に関する価値観に基づく生き方、死に方として定義するのであれば、変容を及ぼす事象はどのようなものであろうか。病院死が主流となり、また葬送儀礼の簡素化、外部化が進む中で、死が遠ざけられ、考え、触れることが少なくなっている。この状況が、死生観を熟成させる契機を減らしているのではないだろうか。

1-3. 南方の死生観

奄美群島、沖縄諸島には、本土とは異なる文化、風習が根付いている。これらの差異が死生観においても葬送儀礼に現れるなど特徴を有している。本土から離れた物理的環境、人、モノ、情報の流れの違いが独自の文化、風習を生み、価値観に影響を及ぼしている。ここでも、時代状況の変化に伴い、死生観と結びつきの深い葬儀、葬送も変化していると考えられ

る。奄美群島・沖縄諸島は、南方の死生観として、くくられることがある。では南方の死生観とはどのようなものであろうか。映像民俗学者である須藤義人（2019）は、沖縄の離島の祭り、葬送儀礼を通して、人々が生と死をどのように捉えてきたかを『神の島の死生学——琉球弧の島人たちの民俗誌』に著している。

沖縄の伝統的死生観の前提となるのが「マブイ、マブヤー、タマス」などの名称で呼ばれる「靈魂」の観念であった。これは人間の生存の根源的な霊的存在であり、沖縄の民間信仰における具体的なアニミズム的思考の表出である。この「魂」という観念は、生命そのものの不安定さを物語っており、人々はそのイメージを共有することによってそれを納得していたのであろう。近代医療が普及するまで、人間の出生には危険がつきまとい、弱気になってもその原因が解らないことは多く、生も死も極めて不安定なものであった。また、魂の物語を共有する人々にとって、肉体的な死は完全なる消滅ではなく、魂にとっての「新しい段階への入り口」として存在しているといっている（163）。

沖縄の死生観の根底には、靈魂の概念があるとしている。この靈魂観は、近代医療の普及以前、死がより身近な存在であった頃、肉体的な死は生の消滅ではなかったことを反映している。死によりつながり、受け継がれる物語を必要とした名残が靈魂観にも表れている。

2. 死を悼む行為の変容

死は残されたものにとっては始まりでもある。個人を悼む行為として、葬送儀礼がある。民族、地域に根差したものから、すでに廃れたもの、地域や社会構造の変化から、変容を余儀なくされるものまである。葬送儀礼は、死生観を表す鏡でもある。

2-1. 葬送儀礼

民俗学者の山田慎也（2007）は「葬送儀礼とは、死を物理的、文化的、社会的に変換する儀礼」としている。日本における遺体の物理的返還としては、火葬が一般的で「世界一火葬率の高い国家」である。しかし、わずかに別の葬送が残っている。風葬、樹上葬は、国内においては奄美群島、沖縄諸島においてかつて存在していた葬法である。また、ミイラ葬は、即身仏として僧侶が行った事例が存在する。

僧侶、仏教学者であり葬儀、葬送に関する著書を多く持つ、松濤弘道（1991）は『世界の葬式』において「今日の葬制や墓制も過去の風俗習慣が発展してきたものであり、突然発生したものではないことはいうまでもない。いずれにしても人間が葬儀を営むのは故人の死を悼み、冥福を祈り、生き残る者の心にケジメをつけ、遺族を慰め励まし、死の意味を考える

社会的行為として、古今東西を問わず行われてきたのである」(289)。松濤は、葬儀に続く遺体埋葬の方法として、以下の五つをあげる。

- 1、遺体を地上や洞窟に横たえる方法（風葬、洞窟葬、鳥獸葬）
- 2、地下に埋葬する方法（土葬、火葬）
- 3、地上のある高さに置く方法（樹上葬、台上葬）
- 4、海や川に流す方法（埋葬、水葬）
- 5、防腐処置をして永久保存する方法（ミイラ葬）

高橋繁行（2021）は『土葬の村』で京都奈良の県境にある土葬の習慣を残している村の葬儀埋葬について報告している。「土葬の村の風習でなにより特徴的なのは、死者を埋葬地まで送る際に、野辺の道で長蛇の葬列を組むことにある。遺族、親戚、僧侶、一般の村人が参列し、白い幟が風に舞い、村人が手作りした葬具を野道具として携え、死者の棺を担いで歩く。これを野辺送りという」(5)。

上記の葬送儀礼は、遺族、地域住民、宗教者が、故人が生きた場、残されたものが生きる場との結びつきを再認識させ、ゆっくりと段階を踏んだ儀礼を通じて、死を悼み、故人と向き合い、地域の中での結びつきの関係性も深めることがある。

世界各地の葬送を取材したサラ・マレー（2014）は、葬送慣習と墓所の多様性は、来世に対する考え方が反響するとしている。また、八重山諸島の葬送儀礼においても、死者への恐れと悼みにおいて特色のある風習がある。古谷野洋子（2019）は『八重山諸島の葬儀』で、八重山諸島の自葬の伝統とそれに伴う死生観について取り上げた。同書においては、「自分たちの地域社会の死後の世界観や靈魂観、祖先観など（以後、死生観と統一して記す）に基づいて死者を送るものと考えられる。」としている。また、死者は恐れられ、葬家以外の人々に忌避されていたといえよう。このような死者に対する恐れと忌避の感覚は、他の島々でもみることができる。

しかし、このような死者に対する「濃厚な恐れ」の感覚は葬儀の外部化の進行により薄れてきているとしている。加藤正春（2020）は、『奄美沖縄の靈魂観』で奄美・沖縄の出産、葬送の特徴的な儀礼を取り上げた。そのなかで、紹介された別れ遊びがある。

若者が死亡した場合に、死んだその若者を追悔するために、その同輩仲間が墓前に集って行われた。彼らは、一日ないし数日の間、夜になると墓所に通い、墓前に設けられた小さな空間（「露庭」）で、歌舞音曲をともなった伽をした。その期間は葬儀（第一次葬）の直後から七日程のことが多かったが、儀礼では、ときに墓室内から死者を出し、死体を起き上がらせて時を過ごすこともあったという（14）。

ここには、死、遺体との密接な関わりがある。死との向き合い方の中で、自宅での看取り、自宅葬を行うことで、死への畏怖と、身近に思う感覚、生者と死にゆく人、死者との結びつきを深める場合がある。現在、一般的である病院死と葬儀に関わる一切の外部化、簡素化が、死を見えにくい存在にしている。葬儀社に葬送儀礼を委託することが、現在は一般的であるが、簡素化が進行することで、死者への思いの昇華や故人に対する思いの対話を行う機会を逸してしまうことが考えられる。

現在、継承者の不足等から、葬送の簡素化が進み、高瀬顕功（2021）が指摘するように、「コロナ下で寺院活動縮小」も相まっている。時間をかけ地域に根付いた方法で葬送儀礼を行うことが廃れていくことは、死との向き合い方の変化を生み出していくのではないだろうか。

2-2. 悲嘆の個人化

坂口幸弘（2010）は、喪失の分類として、「人物」の喪失、「所有物」の喪失、「環境」の喪失、「体の一部分」の喪失、「目標や自己イメージ」の喪失に分けられるとした。悲嘆とは、喪失に対するさまざまな心理的・身体的症状を含む情動的（感情的）反応である。本稿が対象とする「人物」の喪失において、坂口は、肉親との死別離別、友人、同僚、先生、隣人との別離等を対象としている。そして、人物の喪失において、悲嘆を共に共有する他者との分かちあいが行われると述べる。人物の喪失は、その人に関わる、関わった多くの人が存在する。悲嘆の当事者が関わる周囲の人と分かち合いが行われていく。

鷹田（2020）は、現代社会において「悲嘆の個人化」が進行していると指摘する。

悲嘆の個人化とは、それまで他者との間で共有されていた悲嘆が、より私的な経験になっていくプロセスを指す。悲嘆の個人化は悲しみ方の自由度を広げるという肯定的側面だけでなく、死別体験者の不安や孤独、負担を大きくするという否定的側面を有する（1）。

悲嘆は、苦しみ、悲しみの只中に入りながらも、自分の生を見つめなおす契機にもなる。悲嘆を私的なものとして、己の中で昇華しようという試みは、場も他者もいらず行うことが出来る。しかし、自己の物語の開示と共有が出来ず、昇華にいたらない場合は、より深い悲嘆に陥り、抜け出せなくなる可能性がある。

2-3. グリーフケア

島藺（2012）は、『日本人の死生観を読む』で、「キリスト教色が強いホスピスやグリーフワークの広がりを追うように仏教界はビパーテ（サンスクリット語で「休息の場所」の意味）の運動に乗り出すようになる（41-42）」として、グリーフケアの場の広がりを指摘している。

日本グリーフケア協会は、グリーフケアの定義をホームページで次のように公開している。

死別を経験しますと、しらずしらずに亡くなった人を思い慕う気持ちを中心に湧き起こる感情・情緒に心が占有されそうな自分に気づきます(喪失に関係するさまざま思い:「喪失」としてまとめます)。また一方では死別という現実に対応して、この窮地をなんとかしようと努力を試みています(現実に対応しようとする思い:「立ち直りの思い」としてまとめます)。この共存する二つの間で揺れ動き、なんとも不安定な状態となります。同時に身体上にも不愉快な反応・違和感を経験します。これらを「グリーフ」と言います。グリーフの時期には「自分とは何か」「死とは…」「死者とは…」など実存への問いかけをも行っています。このような状態にある人に、さりげなく寄り添い、援助することを「グリーフケア」と言います。

グリーフケア専門士の養成やサポートを行う団体等の取り組みも国内各地で行われている。悲しみを吐露したい思いを抱えている人に対しては、寄り添うもの、受け止めるものが必要である。

悲嘆の個人化が進行する現代社会において、それを共有する人や場は限界がある。しかし、死は、すべての人が当事者として語ることでできるテーマであり、自分とは異なる世界にいる他者のテーマではない。生は他者との関わりの中で存在し、死は個人のものであると同時に、社会的なものである。個人的な悲嘆は、死にかかわる物語を他者に伝えることを通して共有が可能になる。悲嘆を他者と共有することは、それをもたらした死について語ることでもある。

死の対話の場において、死に関わる自分の思いを表現しながら、他者と緩やかに繋がることができる。デビット・ボーム(2007)の定義によると、対話とは、考えをはっきりと述べても、自分の主張や立場に固執することなく、互いの言わんとする意味を深く探求する会話である。自らの思いを語り合い、話し合う場である。問題を解決する、新しいものを生み出すためには、それぞれの思いを率直に話し合う対話が必要となる。自分の想いを知り、理解してくれている存在が、生きる力に繋がっていくことは珍しくない。

3. 死を語る場の生成

死のタブー視が薄れ、死というテーマについての多様なアプローチが表れた。たとえば、1990年代の死体写真ブーム、『完全自殺マニュアル』、そして2010年代の終活ブーム等である。また、対話により、死生観、死の物語を共有するため、草の根の取り組みと行政のサポートの試みが始まっている。

3-1. 煽情的に語られる死

1990年代の死の対話を取り巻く事象として、1993年の完全自殺マニュアルの刊行及びその後の騒動が上げられる。『完全自殺マニュアル』は自殺の方法を詳細に記したもので累計100万部以上のベストセラーとなり、様々な議論を引き起こした。同書は、自殺の具体的方法をデータに基づき詳細に記述したものであるが、著者の鶴見済（1993）はまえがきにおいて自殺を進める本ではないとしている。「僕の知人に、それを飲んだら平気でビルから飛び降りちゃうほど頭のなかメチャメチャになっちゃうエンジェル・ダスト、っていう強烈なドラッグを、金属の小さなカプセルに入れてネックレスにして肌身離さず持ち歩いてる人がいる。『イザとなったらこれ飲んで死んじゃえばいいんだから』って言って、定職になんか就かないでブラブラ気楽に暮らしている。この本がその金属のカプセルみたいなものになればいい。」(8)と述べ、いつでも死ぬる方法を知っていること、またその意識を持つことが生きることにつながるとしている。死を縁遠いものと感じ、生の充足感を感じられない人にとって、いつでも死ぬる、という思いや感覚は、空虚な生を艶やかなものにする一定の効果はあろう。

雨宮処凛（2002）は、完全自殺マニュアルが取り扱わなかった自殺が及ぼす金銭的な課題について『自殺のコスト』で取り上げた。

致死量のクスリを手に入れるのにいくらかかるか。自殺すると生命保険はどうなるのか。自殺未遂の後遺症で寝たきりになったら医療費や生活費はどうすればいいのか。イジメ自殺では加害者に損害賠償請求できるのか。過労自殺は労災と認められるのか。電車で飛び込んだら鉄道会社にいくらか損害賠償を請求されるのか。検死や行政解剖にはどのくらい費用がかかるのか。残された家族は自殺でも遺族年金をもらえるのか（10）。

生きていく上では、どのような行為でも金銭の代価が発生する、死を自ら選択し、実行することは社会的行為である。社会的行為には金銭が発生する。また、選択した死の手段により罰金や賠償といった制裁を受けることもある。

死後に生じる金銭的な課題について、社会的に望まれぬ死である自殺は、より厳しい目で見られることがあることを意識する必要があるだろう。

また、後藤京子・杉本侃（1996）は、完全自殺マニュアルの影響が、「一般用医薬品による自殺意図が有意に増加傾向を示し、とくに薬局で簡単に入手できるような知名度の高い一般用医薬品による自殺企図が増加したことが明らかとなった」としており、作者の意図と異なり、自殺幫助の役割を果たしたことが指摘された。また、同書を参考にした複数の自殺も起きている。

ポルノグラフィを、あるテーマを煽情的に取り扱い、感情を煽るものと定義するのであれば、1990年中期～後期における死体写真ブームは死のポルノグラフィの一つと言えよう。

これらが、インターネットの普及以前にムーブメントとなったことは、なぜであろうか。

煽情的な写真、映像等のコンテンツへのアクセスが困難であった時代には、「過激」なコンテンツへの需要があった。しかし、現在は煽情的で過激なコンテンツへのアクセスが容易である。また、一般商業ルートに乗らない個人発信のコンテンツ、SNS、動画配信、発信が容易な現在は、煽情的に取り扱い、感情を煽る情報が氾濫している。「過激」なコンテンツの供給が過多であり、需要を上回っている。

3-2. 終活

2010年代に終活ブームが存在し、各自の死生観、生き方、逝き方を話すニーズから死の対話の場が必要とされた。エンディングノートの作成などは、死に関わる個人的な実践として捉えることができるだろう。終活とは、「人生の終焉を考えることを通じて、自分を見つめ、今をより良く自分らしく生きる活動」である（一般社団法人 終活カウンセラー協会）。

木村由香・安藤孝敏（2018）は、終活に関する記事の推移の研究で「終活という言葉が使われるようになったのは、2009年『週刊朝日』での連載記事がその始まりで、当初は主に葬儀や墓に関する備えが中心であった」としている。記事数は、2015年をピークとし2016年、2017年ともに同水準で推移している。また、読者投稿の比率が年々増加しており、終活が一般に浸透していると指摘している。2012年の新語・流行語大賞トップ10に終活が選ばれたことから、2010年代には終活という言葉が、一般社会に浸透したことがわかる。

終活記事における終活の具体的な内容は「葬儀」と「墓」を中心に、「相続」と「遺言」、そして「エンディングノート」が加わるという形になっており、幅広いテーマが登場しているとはさほど言えず、特に介護や医療については関連が薄いようである。おそらくこれらのトピックは、終活の話題というよりもむしろ高齢社会におけるテーマとしてとらえられ、新聞記事ではそれぞれ個別に扱われているものと考えられる（木村・安藤、2018：15頁）。

終活は、死と向き合うために一定の効果を果たしたが、その限界も露わとなった。終活は、多くの意味を含んだ用語、活動であるが、自らの終焉の迎え方を事務的な面に特化して行うという捉え方でメディアに扱われた。終活は、死の対話における多様なニーズに対して、特定の世代や意向を持った人以外に波及することに限界があると考えられる。

3-3. 行政によるサポート

八木橋慶一（2020）は、行政の地域福祉における新たな役割を確認できる事例として、横須賀市の2つの終活支援事業、「エンディングプラン・サポート事業」と「わたしの終活登録」事業を取り上げる。両事業の考察から、行政による市民への終活支援が、地域福祉にお

ける行政の役割の再定義に大きな貢献を果たしている点を明らかにした。また、横須賀市の終活支援事業には、公私協働の普遍的モデルに発展する可能性があることも指摘した。

滋賀県では 2021 年度から、死生懇話会という新たな取り組みが始まった。当該ホームページから紹介する。

「人生 100 年時代の到来とともに、多死社会を迎える中、誰もが避けられない『死』について、行政としても真正面から考えることで、『生』をより一層充実させる施策につなげる契機とするために、令和 2 年度に有識者による『死生懇話会』を設置して、様々な角度からの議論を深めていくことにしています」（滋賀県死生懇話会）。

この取り組みは、2020 年から開始予定であったが、コロナ下により 2021 年からオンライン開催となっている。また、開催に際し、県庁内でも死というテーマに行政が取り組むことに対して批判もあったとのことである。当該ホームページは、死に関する様々な取り組みを行っている団体や個人に対してインタビューコーナーも設けており、死生懇話会が今後も継続される予定である。

死のタブー視が薄れ、死の話題をどのように取り上げるかを模索する中で生まれたのは、死のポルノグラフィ化であった。また、差し迫った自らの生の閉じ方、終わり方を考え、手続きを行うため、終活が一般的用語になるまで広まった。煽情的な語り、遺産、墓など事務的な人生の閉じ方の話題にとどまらない、死と生の大切な価値観を掘り下げることが必要とされた。これらの事象の先に、自らの生と死を考えるための草の根の取り組みと行政のサポートが生み出された。

おわりに

死にまつわる事象と話題は、哲学的な探求から終活、看取り、霊魂、死後の世界、輪廻転生、死の苦痛、残されたもの、生の閉じ方、残されたもののケア等多様な論点があり、置かれている状況により関わる場面は変わってくる。死を意識する機会とは、どのようなときであろうか。身近なものの死、著名人の死、社会的な死の話題、自らの死を意識する心身の変化、個人的な体験や社会の変化、事象により、死生観が変容する場合がある。死は、個人のものであり、社会的なものでもある。対話は一人では行えない。本稿では、死の対話が求められ、多様性を持ち拡大している状況を取り上げた。対話の意義に着目し、死について語る場の創出を通して、死生観の醸成を進めていく試みを追ってきた。

こうした状況において、吉川直人（2020）は、話しにくい話題と言われている死について、カジュアルに語り合う場「デスカフェ」の試みが進んでおり、2011 年にイギリスから広がり

が加速したデスカフェが、日本の各地で多様な形態により開催されていることを調査している。

死の対話の場の必要性を感じたステークホルダーたちは、死を語る場を創造し、対話をとおして、死のエピソードを共有する試みを始めている。それは、山崎浩司（2018）によれば「死別に共感的で互助的なコミュニティの形成」である。それは、あいまいでゆるやかな居場所となるコミュニティを想像／創造するための場を与え合う場になる可能性を秘めている。

死の対話の場は多様である。たとえば、自分の人生の最後に受ける医療や介護、自分の生の閉じ方を考え、開示する ACP や終活という場がある。また、喪失と悲嘆を開示し、対話する自死遺族会、グリーフケアの場という場もある。さらに地域コミュニティの中で行われる対話の場もある。

人は癒しや学びを求めて対話の場に参加する。そして同じく参加している人々との間に相互作用が生まれ、互いに学び合い、そこで癒やしを得たり、つながりを創造したりすることもある。

死にまつわる事象や、付随する問題から、困難さや苦痛が生じることがある。しかし、自らの生のため、ともに生きている人のため、死後に残される人のため、死に向き合い、死の問題から目をそらさない試みが進んでいる。死のタブー視の変化、死生観の変容、死への向き合い方の多様性の土壌から出現した取り組みが死の対話である。

参考文献

- 雨宮処凛、2002、『自殺のコスト』太田出版。
- アルフォンス・デーケン、2003、『よく生き よく笑い よき死と出会う』新潮社。
- 伊佐敷隆弘、2019、『死んだらどうなるのか？—死生観をめぐる 6 つの哲学』亜紀書房。
- 石丸昌彦・山崎浩司、2018、『死生学のフィールド』放送大学教育振興会。
- 入江杏、2012、『悲しみを生きる力に—被害者遺族からあなたへ』岩波書店。
- エリザベス・キューブラー＝ロス、1998、『死ぬ瞬間—死とその過程について』鈴木晶訳、読売新聞社。
- 木村由香・安藤孝敏、2018、「マス・メディアにおける終活のとらえ方とその変遷—テキストマイニングによる新聞記事の内容分析」『技術マネジメント研究』(17)、1-19。
- 大村哲夫、2019、「臨床宗教師ならではのケア—宗教的ケアとスピリチュアルケアのはざまで」『東北宗教学』(15)、263-284。
- 小林達也・大谷まり、2020「慢性期医療でのターミナルケア 少子高齢・人口減少・多死社会を迎えている島の病院での看取り」『日本慢性期医療協会誌：JMC』28 (6)、44-49。
- 加藤正春、2020、『奄美沖縄の靈魂観—生と死の民俗倫理』岩田書院。
- 小泉義之、1997、『弔いの哲学(シリーズ道徳の系譜)』河出書房新社。
- 小堀鴎一郎、2018、『死を生きた人びと—訪問診療医と 355 人の患者』みすず書房。
- 小島美羽、2019『時が止まった部屋—遺品整理人がミニチュアで伝える孤独死のはなし』原書房。
- 古谷野洋子、2019、『八重山離島の葬儀(琉球弧叢書 32)』榕樹書林。

- 後藤京子・杉本侃、1996、「自殺に用いられる薬毒物と出版物による影響に関する研究」『民族衛生』62 (2)、53-64。
- 佐々涼子、2020、『エンド・オブ・ライフ』集英社インターナショナル。
- サラ・マレー、2017、『死者を弔うということ—世界の各地に葬送のかたちを訪ねる』草思社文庫。
- 佐藤伸彦、2015、『ナラティブホームの物語』医学書院。
- 坂口幸弘、2010、『悲嘆学入門—死別の悲しみを学ぶ』昭和堂。
- 澤井敦、2002、「死のタブー化再考」『社会学評論』53 (1)、118-134。
- ジェフリー・ゴラー、1994、『死と悲しみの社会学』宇都宮輝夫訳、ヨルダン社。
- 島田裕巳、2021、『「墓じまい」で心の荷を下ろす』詩想社。
- 清水加奈子、2020、『死別後シンドローム—大切な人を亡くしたあとの心と体の病い』時事通信社。
- 島菌進、2012、『日本人の死生観を読む』朝日新聞出版。
- 柴田久美子、2018、『私は、看取り士。わがままな最期を支えます』佼成出版社。
- 須藤義人、2019、『神の島の死生学—琉球弧の島人たちの民俗誌』沖縄大学地域研究所叢書。
- 鷹田佳典、2020、『現代社会における悲嘆の個人化』『現代宗教』2020、83-109
- 高瀬顕功、2021、「新型コロナウイルスがもたらした寺院活動への影響—寺院向けウェブ調査より」『宗教と社会貢献』11 (1)、31-52。
- 高橋繁行、2021、『土葬の村』講談社。
- 高橋正、死生観の比較文化学の可能性, 創価人間学論集(14), 19-37, 2021-03-31
- 立岩真也、2004、『ALS 不動の身体と息する機械』医学書院。
- 鶴見済、1993、『完全自殺マニュアル』太田出版。
- デヴィッド・ボーム、2007、『ダイアローグ—対立から共生へ、議論から対話へ』金井真弓訳、英治出版。
- 長岡美代、2021『多死社会に備える：介護の未来と最期の選択』平凡社。
- フィリップ・アリエス、1983、『死と歴史—欧中世から現代へ』伊藤晃訳、成瀬駒男訳、みすず書房。
- 堀江宗正、2014、「日本人の死生観をどうとらえるか：量的調査を踏まえて」『臨床死生学・倫理学研究会（東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター、主催：上廣死生学・応用倫理講座）』、1-12
- 松涛弘道、1991、『世界の葬式』新潮社。
- 村上靖彦、2018、『在宅無限大—訪問看護師がみた生と死』医学書院。
- 宮下洋一、2017、『安楽死を遂げるまで』小学館。
- 八木橋慶一、2020、「地域福祉における「終活」支援と行政の役割：横須賀市の事例から」『地域政策研究 地域政策研究』22 (4)、101-116。
- 山折哲雄、2002、『死の民俗学—日本人の死生観と葬送儀礼』岩波現代文庫。
- 山崎章郎、2015、『死の体験授業』サンマーク出版。
- 柳田邦男、1995、『わが息子・脳死の11日 犠牲』文藝春秋。
- 山田慎也、2007、『現代日本の死と葬儀—葬祭業の展開と死生観の変容』東京大学出版会。
- 横山奈緒枝、2017、「社会福祉士養成における葬送文化導入に関する一考察—多死社会の到来と弔いの変容における課題」『吉備国際大学研究紀要(増刊)、55-64。
- 吉川直人、2020、「国内のデスカフェの現状と可能性：多死社会を支えるつながりの場の構築」『京都女子大学生活福祉学科紀要』(15)、39-44。
- 米田浩基、2018、『在宅医の告白—「多死社会」のリアル』幻冬舎。

渡辺利夫、2018、『死生観の時代—超高齢社会をどう生きるか』海竜社。

web 資料

「現代用語の基礎知識」選 ユーキャン 新語・流行語大賞

<https://www.jiyu.co.jp/singo/index.php?eid=00029>（閲覧日：2021 年 11 月 1 日）

「終活とは」グリーフケア協会

https://www.shukatsu-csl.jp/about_shukatsu（閲覧日：2021 年 11 月 1 日）

「死生懇話会」滋賀県

<https://www.pref.shiga.lg.jp/kensei/kenseiunei/kousou/316588.html>（閲覧日：2021 年 11 月 1 日）

